

△童子經略本廣本は三四枚許りあり、是れは略本なり。

佛說護諸童子陀羅尼法 爾の時に如來、初めて正覺を成じたまふに、一大梵天王あつて、來て佛の所に詣し、佛足を敬禮して是の言を作さく 南無佛陀耶 南無達磨耶 南無僧伽耶

我れ兩足尊を禮したてまつる。照世の大法王、閻浮提に在りて最初に神呪を説く。彌伽迦、彌迦王、鶉陀、阿波悉摩羅、牟致迦、摩致迦、閻彌迦、利彌尼、利波坭、富多那、曼多難提、舍究尼、捷吒波尼、目佉曼茶藍婆

佛陀に南無したてまつる、此の呪を成就して諸の童子を護り、惡鬼神のために燒害せられず、一切の恐怖悉く皆な遠離せんことを、蘇婆訶。

時に梵天王此の呪を聞き已て、歡喜し護諸童子經を奉行す。

本に云く已上正本を以て書寫し一校し了る。

(朱) 文政七甲申年初秋類本を以て校し了る

祐 淳

國譯澤抄第七 天等終

國譯澤抄第八

○北斗 付大北斗 ○本命星供 ○當年星供

○北斗

○一字金輪遍照尊 北斗七星諸曜宿。 ○行法別行に付く。 ○息災に之を修す。 ○金輪

○教喚呼 ○輪(朱)八幅 ○北斗 ○嚕 ○星形

壇中に嚕字あり、變じて七寶莊嚴の宮殿となる、其の中に紇哩字あり、變じて寶蓮華臺となる、臺上に教喚呼字あり、變じて金輪佛頂となる、其の後邊の左右に七荷葉座あり、座上に各の喚呼字あり、即ち北斗七星となる、前に荷葉あり、上に土星日月火水木金羅計十二宮神廿八宿並に諸眷屬等重重に圍繞す。

○鈴護摩に付て之 ○召北斗印言虚心合掌して大指を以て二無名指の甲を捻し、二中指・二小指を蓮葉の如くし、二頭指小しき開き加して來去せよ。(朱)二頭共に三度來去す云 曩謨三曼哆、那囉曩、唵醯枳、頗伊賀伊那伊迦伊、囉謨羅合哆、羅伽囉、哈、薩囉賀
○七曜惣印呪或は二頭指を開き立てよ 唵薩羅醯入嚕里耶、鉢羅波多、而偷底羅摩耶、莎母

國譯澤抄第八

三度來去
勿れ、左
右なる
頭を
召す
頭
合
二
名
指
の
甲
を
捻
し
、
二
中
指
・
二
小
指
を
蓮
葉
の
如
く
し
、
二
頭
指
小
し
き
開
き
加
し
て
來
去
せ
よ
。(朱)二頭共に三度來去
云
曩謨三曼哆、那囉曩、唵醯枳、頗伊賀伊那伊迦伊、囉謨羅合哆、羅伽囉、哈、薩囉賀
○七曜惣印呪
或は二頭指を開き立てよ
唵薩羅醯入嚕里耶、鉢羅波多、而偷底羅摩耶、莎母

壇中云云 巳
下道場觀

頂輪 金輪なり。

○廿八宿惣印呪二手合掌して二大二 歸命諾乞ナウキ及シヤク但ラニ羅額ラニ那ニ事ニ曳ニ莎ニ哥ニ ○八供四攝等

○本尊加持 ○先づ二頂輪王智拳印 教嚙呪智拳印を用ふ。 ○次に北斗印言内

して二頭指を立て合せ 唵ヒタシ颯シナウヤ多ナウヤ而ハンシヤヒシヤヤ曩セムボウ野マツハヒ、伴ナウ惹アラキ密シヤム惹ハハ野ハハ、染ハハ普ハハ他ハハ摩ハハ、娑ハハ嚩ハハ囉ハハ彌ハハ、羅ハハ訖ハハ山ハハ、婆ハハ嚩ハハ都ハハ、娑ハハ

嚩ハハ賀ハハ ○又の印初の召北北斗印初、朱唵颯多而曩野 ○正念誦頂輪王、朱百反、朱唵颯多而曩野

○印外縛して二頭指を裏形にし、二、朱唵颯多而曩野 ○又の印左右の火空相ひ捻し、二水を立て合眞言常の

如し朱唵颯多而曩野 ○又の印左右の火空相ひ捻し、二水を立て合眞言常の

○散念誦 佛眼 大日 頂輪王別 白衣 延命 八字 本尊 本

命星 當年星 本命曜 本命宿 本命宮 七曜惣 廿八宿惣 星息災

一字

○護摩六段 香障寺次第の如し ○火天段常の如し ○金輪段自身觀了て智拳印を以て物嚙呪を誦して四處を加

送智拳印一字 ○北斗段白花七葉を取て爐中に投ぜよ、七荷葉の座となる、座上に七のマ字あり、七星となる

呪供物同じ ○北斗段但し本命星を中央に觀じ餘の六を伴となす。合掌して啓する詞に云く、至心奉啓

北極七星 食狼巨門 祿存文曲 廉貞武曲 破軍星 今為某甲 灾厄解脱 壽命

延長 得見百秋 今作護摩 唯願垂哀 降臨此處 納受護摩 擁護某甲 悉地從心 召請發遣には召北

斗印言を用ひ、芥子供物は三普通の言なり。但し燒供は小杓を以て七度之を供せよ。

○諸曜段九曜十二宮廿八宿皆此の段に攝す、三重に安坐すべし、各の呼字、大鈞召の印を結び諸曜諸宿の惣

呪を誦して曰く、藥羅羅濕綿里野鉢羅鉢多伽低羅摩耶羅羅曳圖 七曜。諸乞灑恒羅涅蘇那爾曳爾羅羅曳

冠頭の朱書に
結ぶこと三度
す間三眞言を誦
呪(九)先づ七
通用(九)先づ七
宿(九)先づ七
召(九)先づ七
鈞(九)先づ七

○後火天段常の如し ○世天段八方天日月 ○印言は例の如し。 ○後加持普通北斗呪
△大北斗の事朱日中の時、後夜に繼ぐ。但し結願の時
○大壇護摩に付く。 ○小壇六次第に之を列ぬ、殘六星を本尊となすか、 ○伴僧廿口常の
朱小壇は鈴杵を立てず、打鳴は火合蓋を用ふ。大壇・小壇を備
るに大慢を引く 護摩壇・小壇等の間に隔ての大慢を引かず。

○本命供

○先づ供物を壇上に辨じ備へよ奥に圖あり。 ○次に着座普禮朱金剛合掌して三度禮拜し普禮の眞言
心普禮なり、此
前に禮拜あり。 ○塗香 ○次に淨三業三部被甲等 ○次に加持香水常の朱三古印
○次に加持供物三古印を用ふ、朱吉哩吉哩の明。 縛目羅呼發吒 ○次に施甘露明を以て之を加持せよ同じ朱是

持供物なり先づ三古の印、吉里吉里明にて加持供物し、次に同じき三古の
印にて施甘露明を以て又た加持供物し、兩眞言を以て加持供物するなり。

○次に表白神分 ○五悔 ○次に發願 至心發願 唯願大日 大聖文
殊 妙見菩薩 北斗七星 本命元神 七曜九執 諸宿曜等 降臨壇場
所設妙供 哀感納受 護持某甲 消除不祥 增長福壽 所求悉地 決定

次に傍ら朱
書して金二打とい
ふ。
次に傍ら朱
書して金一打とい
ふ。

圓滿 及以法界 平等利益

○次に五大願 ○普供養三力偈(朱)金一打 ○次に四無量觀 ○次に勝心 ○大金剛輪 ○次に地結 ○四方結

○次に道場觀如來 拳印 壇上に師子の座あり、座上に紇哩字あり、變じて八葉の蓮花となる、花臺に咒字あり、淨月輪となる、月輪の中に滿字あり、智劍となる、智劍變じて大聖文殊となる、首に八髻を戴く、身は躰金色にして右手に智劍を執り、左手に青蓮花を執る、上に智杵を立て大光明を放ちて十方世界を照せり、此の光中に無量の星宿悉く顯現す、即ち文殊變じて妙見尊となる、其の前に三荷葉座あり、中央の座上に吽字あり、變じて星形となる、星形變じて本命星となる、左邊に荷葉座あり、上に吽字あり、變じて本命宿となる、右邊に荷葉座あり、上に吽字あり、變じて當年屬星となる、各の身相殊妙にして光明映徹す、無量の星宿前後左右に圍繞す七處を加持す 唵 僕 欠

○次に大虛空藏 ○小金剛輪 ○次に送車輅 ○請車輅 ○次に大鈞召眞首 末 本命星の名を呼び、請句並に(朱)大鈞召眞首の末(鈔)賀の以前なり本命星の名を一反之を唱へ、次に醫隨曳四字の明を加ふること常の如し 曳圖弱畔銀解莎賀云云、大鈞召の印を作り三度招く間此の如く用ふるなり、四

字の明を加ふと雖、四攝印は作らざるなり、只だ眞首に四明を加ふる許りなり、印は只だ大鈞召印許りなり。

○次に馬頭辟除結界 ○次に虛空網 ○火院 ○大三摩耶 ○次に闍伽本説に云く、若ば、此の處に於て宜しく之を差へ。 ○次に荷葉座左手を拳に作り腰を押し、右手は五指を申べて肩の上に掌を仰け 歸命惡 ○次に四明

○拍掌 ○次に文殊印言虚合して二火を以て各の二水の甲を(朱)文殊印。二手虚心合掌して二中指を以て二無名の背端を合せ二大端を合せ二大端を併せて空の端を捻せよ。に付け(二中は端を合せず)二大を並べ立て二頭を屈しの上に置く。 唵 阿 味 囉 吽 佉 左 路

○次に召北斗印明常の(朱)二手虚合して二無名を屈して掌に入れ、二大を以て並べて二無名の甲を押し、二頭を屈して着くる勿くして三度來去せよ。眞首は召北斗眞首常の如し。 ○次に諸曜印明常の(朱)諸曜印。二手虚心合して二頭二大共に開き立て着くる勿れ(簡説)。或は二大許り之を開け、眞首開離離離離野 ○次に五供養常の(朱)是の事供養を五供養といふなり。六種供養の内、闍伽を除き五供といふなり。塗香・花・燒香・飲食・燈明なり ○次に讚四智或は諸天の讚 ○次に普供養・三力・祈願等 ○次に禮

佛 南無摩訶毗盧遮那佛 南無釋迦牟尼佛 南無曼殊師利菩薩 南無妙見菩薩 南無北斗七星 南無七曜九執 南無十二宮神 南無二十八宿 南無本命元神三反 南無三部界會一切三寶

○次に佛眼印明常の如し(朱)大呪印明なり。 ○次に正念誦本命星 當年星 本命宿 各の眞首百反 ○次に本尊加

(一) 文殊 八字文
(二) 北斗 惣呪を
いふ
(三) 本命等 先づ
本命星、次に當年
星、次に本命
(四) 次に傍に云く
金一打すと

持三種本命等各別の印言なり。師説は (朱)本命星 當年星 本命宿 皆な金剛合掌して各の眞言を誦するなり ○次に散念誦 佛
眼 大日 白衣 (一)文殊 (二)北斗三百反 本尊 (三)本命等の三 破障 慈護
心經 七卷 許り
○次に佛眼印明 (朱)大呪は 常の如し。 ○次に後供養 (朱)塗香 花 燒香 ○次に讚 普供養三力
祈願等 ○次に禮佛 ○次に廻向 ○次に解界 (朱)大三昧耶 火院 金剛刺 馬頭
○次に撥遣 右手を以て拳に作り彈 唵囉日羅母乞及穆 ○次に三部・被甲護身畢りて
出堂。

(五) 知るべし。此
の次に壇圖あれど
も之を略す。

若し銀錢を用ふれば、法身の偈若しは心經等を誦し之を焼け、錢の數は諸説不同なり。先づ師説に付かば、十二貫を以て一連となし、人の年に隨ひて之を用ふべし、若し十歳の人のためには十連を充つ、但し本命三星の供には三所各の十連なり、併せて三十連なり、自餘は之に准じて知るべし。(五)
本命供の事、上古諸説不同なり、用ふると否とは時に隨ふか、當年星に副へ供する事は本命の號を帶せず、仍て其の謂れなきに似たるか。然るに當時は要星たるに依て専ら用ふるなり、若し當年星を除く時は生月宮を入れ替ふ、是れ則ち一説なり、彼の時

(一) 次に壇圖あれども之を略す。

は本命宿の所に本命曜を並べ請すべきなり、曜宿其の體別なりと雖、是れ生日の中の二星となす、仍て一に囑して用ひ來るなり、但し又た曜宿各別の供の義なきに非ず、然るに當年星殊に供を用ふと爲るなり、此の如く重重用否は隨時たるべしとは、諸師の圖次第等又た一純ならざるか、行者須らく意を得て用ひ修すべきのみ。(二)

當年星若しは要星供の事
○行法 十八道に付く、是れ則ち一師の説なり。若し 聊か消息の事あるべき等。○先づ發願の時、本命元神の句を改めて、當年屬星 若しは某大星。自を唱ふべし。○次に道場觀の時、三本命を改めて一星 當年若しは要星 を觀すべし。○次に本尊加持、三を改めて只だ一星の印明を用ふべし。○次に正念誦、三種を改めて兩呪 先づ北斗 次に本尊 を誦すべし。○次に散念誦、本命等の三種の眞言を改めて本尊の一呪 千反若しは萬反 を用ふべし、自餘の眞言等は前に同じ。○次に錢數は前に同じ。但し十歳の人のためには、十連を以て左右に分ち、各の五連づゝ之を懸く、若し十一歳の人のためには、今一連を加へ、一方は各々六連を懸くべし、是れ左右をして等同ならしむる義なり。他はみな之に准じて知れ。
已上此等の外に別の相違あるべからざるか。

備考 本文上部の梵字は對譯せり、猶ほ原本は朱書なり。

○七星印言(朱)皆な金剛合掌なり、故に當所許り、星に隨ひ相違するなり。

吠 貪狼星 金合して額 唵 羅羅尼 唵 羅羅尼、吠。多尼 巨門星 先印を面 唵 俱嚕、唵 羅羅尼、迦 祿在星 先印を左眼 唵 婆羅多伽、吠 鉢羅 文曲星 先印を鼻 唵 伊喇 唵 羅羅尼、吠。他嚕 廉貞星 先印を右眼に當てよ 唵 吐 唵 羅羅尼、唵 曩 武曲星 先印を口 唵 譏 都嚕、吠。縛 破軍星 先印を頭 唵 婆 唵 唵 哈 吒 吠。

○九執印言 皆な金剛合掌を用ふ、是れ師説なり、又た(朱)九曜皆金剛合掌にて有るべきなり、師傳なり。但し各別の印をも用ふ、又た宜しかるべきなり、心に任すべき。

阿。日曜 先づ合掌して風以下の四指、頭相ひ柱へ、前方の大を開いて二空は水の下節に着けよ。前素。月曜 定の手は火空相ひ捻して餘は直く立て造花を月曜持する如くし、右手は胎拳に作て腰に安け。阿。火曜 左拳を腰に安し、右の五指申べ立て、空指を母。水曜 二羽内縛して立て合せ、二頭指二大を並べ没。木曜 二手金剛合掌して二空を直く立てよ。戌。金曜 内縛して二中指刃へ立てよ、但し惠の中指稍舎。土曜 鉢印常の如し。

(二)朱註に云く十二宮各別の印はこれなし。

羅。羅喉 七曜總印 師説 唵 羅引 戸曩、阿素羅 合 維惹野、塞摩 捨 翹 曩 野 名 扇 底 迦 里、娑 嚩 賀 計。計都 印は前に 唵、嚩 曰 羅、合 計 都 曩 引 曩 乞 殺 合 担 囉 合 囉 惹 野 位 吠、娑 嚩 賀

○十二宮真言 總印。虚合して二火二空を相ひ刃へよ。彌。魚宮。唵 彌 那、波 多 曳 莎 哥。迷。羊宮。唵 迷 沙、波 多 曳 莎 哥。羅。牛宮。唵 毗 利 沙、波 多 曳 莎 哥。彌。男女宮。唵 彌 那、波 多 曳 莎 哥。迦。蟹宮。唵 羯 囉 迦、吒 迦、波 多 曳 莎 哥。絲。師子宮。唵 絲 哥、波 多 曳 莎 哥。吠。雙女宮。唵 迦 惹、波 多 曳 莎 哥。奢。秤宮。唵 兜 羅、波 多 曳 莎 哥。畢哩。蝸宮。唵 毗 利 支 迦、波 多 曳 莎 哥。他。弓宮。唵 檀 菟、波 多 曳 莎 哥。摩。摩竭宮。唵 摩 伽 羅、波 多 曳 莎 哥。鳩。瓶宮。唵 鳩 槃、波 多 曳 莎 哥。

(三)朱註に云く、廿八宿は皆ながら金剛合掌を用ふるなり、各別の印はあれど儘かならざる事なりと。

○二十八宿真言 總印。前に同なり。質。角宿 唵 質 多 羅 娑 嚩 引、二 合 訶。莎。亢宿 唵 莎 合 底 娑 嚩 訶。毗。氏宿 唵 毗 釋 珂 娑 嚩 訶。阿。房宿 唵 阿 菟 羅 隨 娑 嚩 訶。惹。心宿 唵 折 沙 他、娑 嚩 訶。鉢羅。尾宿 唵 牟 藍 娑 嚩 訶。阿。箕宿 唵 弗 婆 娑 他 娑 嚩 訶。摩。斗宿 唵 鬱 多 羅 莎 隨 娑 嚩 訶。阿。牛宿 唵 阿 毗 止 娑 嚩 訶。譏羅。女宿 唵 沙 羅 波 那 娑 嚩 訶。陀。虛宿

唵タ陀タ茶タ他タ娑タ嚩タ訶タ。 誡タ。 危タ宿タ。 唵タ捨タ多タ毗タ沙タ娑タ嚩タ訶タ。 婆タ。 室タ宿タ。 唵タ弗タ婆タ跋タ陀タ羅タ娑タ嚩タ訶タ。 多タ。 辟タ宿タ。 唵タ鬱タ多タ羅タ、跋タ陀タ羅タ娑タ嚩タ訶タ。 隸タ。 奎タ宿タ。 唵タ離タ婆タ底タ娑タ嚩タ訶タ。 阿タ。 婁タ宿タ。 唵タ阿タ離タ尼タ娑タ嚩タ訶タ。 奢タ。 胃タ宿タ。 唵タ婆タ羅タ尼タ娑タ嚩タ訶タ。 留タ。 昂タ宿タ。 唵タ基タ栗タ柯タ、娑タ嚩タ訶タ。 房タ。 畢タ宿タ。 唵タ虜タ喜タ尼タ娑タ嚩タ訶タ。 虜タ。 猪タ宿タ。 唵タ糜タ梨タ伽タ、尸タ羅タ娑タ嚩タ訶タ。 阿タ。 參タ宿タ。 唵タ阿タ羅タ娑タ嚩タ訶タ。 鉢タ羅タ。 井タ宿タ。 唵タ不タ捺タ那タ婆タ修タ娑タ嚩タ訶タ。 鉢タ羅タ。 鬼タ宿タ。 唵タ佛タ沙タ娑タ嚩タ訶タ。 阿タ。 柳タ宿タ。 唵タ阿タ沙タ離タ沙タ娑タ嚩タ訶タ。 摩タ。 星タ宿タ。 唵タ訶タ可タ娑タ嚩タ訶タ。 頗タ。 張タ宿タ。 唵タ雨タ頗タ娑タ嚩タ訶タ。 止タ。 翼タ宿タ。 唵タ求タ尼タ娑タ嚩タ訶タ。 訶タ。 軫タ宿タ。 唵タ訶タ莎タ多タ娑タ嚩タ訶タ。

國譯澤抄第八終

國譯澤抄第九 作法

- 地鎮 ○鎮壇 ○略念誦 ○南向作法 ○御加持 ○御衣木加持 ○神加持
- 産兒浴湯加持 ○用鉢作法 ○手洗加持 ○柴洗手 ○厨作法 ○隱形法
- 寝時結界 ○降伏諸魔法 ○神供(付入壇時の用意) ○施銀鬼 ○造塔

〇〇地鎮の事

○先づ幄二字を立てよ一字は中心に之を立てよ即ち鎮所、一字は其の前に之を立て供具を備へよ。 ○次に大阿闍梨、法服を着し隨身の弟子兩三輩、前づ前きの幄に鎮供を備ふ供物等諸國に課して之を備へ進らせしむ。 先づ五色の糸二筋を纏る、次に交五色の絹幣各の一捧、即ち各色に随ひて鏡形を彫り之を繋ぐ。表に三次に金銅の瓶蓋蓋に銀錢廿一枚並に五寶・五藥等を盛り、五色の糸を以て之を結ぶ有説。

○次に壇供を備へよ圖あり。 ○次に大阿闍梨、中心の幄に入て供養法了て念誦の間、先づ一人の弟子鎮所に臨んで灑淨し、次に又た一人ありて散供し、次に又た一人は地

を掘る、其の後ち大阿闍梨、座を起たずして驚發地神の偈、次に白芥子を加持して七度之を投ず。

次に掘る所の穴の中央に輪を置き、輪の上に件の瓶を置き、件の幣を立て、並に飲食・燈明等を置き、其の後ち始めて東方より前の如く鎮供を置く等、然る後に概を立て五色の糸を曳き、土を以て之を埋めて、其の上に五の丸石を置く。

○次に夫を召し鍬を以て廻堂の壇四徑を掘らしむ、即ち弟子一人、後に隨て水を灑ぐ桶に水を盛り杓を以て加持す、始め東北方角より之を灑ぎ、胎藏灑淨の眞言を用ふ。

次に又一人ありて五穀の粥を桶に盛ること前の如し、加持して杓を以て之に汲ぐ、心經の呪の上に、怛姪也他の句を加へて之を誦す。次之又一人供を散ず盛折敷之を散じ、地天の眞言を誦す。

其の後、夫跡を追ふて之を埋む。鎮し了て大阿闍梨、後供養して之を退出す解界撥遣

(二)不動地天次に壇圖あれども之を略す。

はなしと云云、但し私に云く、大金剛輪、如來拳、(二)不動地天

(朱)最前に淨衣を着し、以後鎮所に於て五色の糸を緝る、其の後に五寶等を入れ、て瓶を封じ了て後、塗香體身以下するなり、先づ塗香、次に淨三業三部被甲

〇鎮壇作法

(一)至の字か。或はいふ

(二)觀觀想せよ地下金剛輪際に至て、黄金髮毛骸骨等、一切不淨物なはしと云云、灑する間は眞言なり、常の如く灑水するなり、杖を以て之に灑ぐ。

(三)灑淨大阿闍梨散杖を以て三度に灑ぐ、加持これなし。

(四)合掌 金剛合掌。(五)鉢印 註に云く、三度之を招き鉢印に作り右風を三たび之を招け。

其の所に(一)至て先づ阿闍梨東方に向ひて半疊に坐し護身結界す。

師説に、先づ五色の糸二筋を緝る、次に五寶等を入れ、五色の線を以て之を結ぶと。

○次に香水を加持し、自身並に供具土地に灑淨せよ(二)觀あり。 ○次に不動呪を以て百遍を加持せよ

○次に事由師云く金 ○神分省略 ○次に桶二口水粥 散供等一折散。

師云く已上の加持作法、神供の如し。 ○次に地神地を按ず 汝天親護者 於諸佛導師 修行殊勝行

淨地波羅蜜 如破魔軍衆 釋師子救世 我亦降伏魔 我畫曼荼羅

○次に如來拳印言常の如し ○次に灑淨

歸命阿鉢羅底三迷、識識曩ナラサマノイ三迷、三摩駄觀識帝、鉢羅訖里帝、毘瑟帝、達麼駄觀尾

瑟達尼莎賀

○次に請白偈(四)合掌 我今奉請 地天神王 與諸眷屬 來降於此 我所供養 願垂納受

○次に召請地天(五)鉢印、 風歸命比里底毗曳莎賀

○次に持地惠を舒べて地を安せ 歸命薩縛怛他藥多底瑟吒曩、底瑟致帝阿遮隸尾爾隸、三摩羅

○次(一)發願の前に、念珠を磨る」と程に念珠を磨る」と

○玉體、寶壽、註に云く、人に依て或は貴體とすべし。或は人依て或は福壽とすべし。註に云く、先づ逆に云く、逆は逆の義なり、順は持善の義なり。

眼或は用ひざるか。但し一字北斗の法 ○次に四方結 虚空結 火院 示三昧耶等の如きは専ら之を加へ結すべし。

○次に(一)發願 至心發願 唯願大日 本尊聖者 大聖大悲 不動明

王 四大八大 諸大忿怒 兩部界會 諸尊聖衆 外金剛部 護法天等

各各還念 慈悲本誓 加持護念 護持某甲 消除不祥 消除

災難 惡靈邪氣 三世怨敵 執着邪心 摧破微塵 天變恠異 惡夢惡想

世間所有 諸不吉祥 皆悉消除 年月日時 一切惡事 怖畏急難

非時中天 惡人怨念 厭魅呪咀 未然解脫 悉皆解脫 三密加持 薰入

玉體 玉體安穩 增長寶壽 恒受快樂 無邊御願 決定圓滿 決定成

就

○次に加持呪を出せ獨古を以て百反(三)逆順に各の五十反加持する 後夜は發願なく只だ印を結

び如し了て數珠を摺り加持呪を出し、中後數珠之を摺れ。

抑、加持の終の言は一字呪なり、此の時獨古を以て右の肩上に於き、伴僧に見せし

むるなり。

○御衣木加持作法

前の机上に花瓶・一口火舎・灑水・塗香器・散杖等を置き、磬臺、半疊これあり。其の木机の後邊に前に向へ横に之を置き。或は立つ法の如くんば、先づ八齋戒を巧匠に於て授くべきなり。

○先づ護身等了て香水を加持し、御衣木並に佛師等を灑淨せよ。○次に木を加持せ

よ吉哩吉哩の印明廿一反。木中に此の佛種子を觀ずべし。 ○次に(一)三禮 如來唄 ○次に金(二)二打 形の如

く事由、神分祈願等を略す。 ○次に草草略念誦法常の如し ○次に獨古を以て此の佛

眞言百遍之を加持せよ。 ○次に佛師を召し之を始め奉る、其の間眞言等を誦す。

藥師 延命 不動 聖觀音 吉祥天等各の七反許りか。

○(三)紳加持事由を用ひず、又た金を打たざるなり。

○先づ紳を壇上に置き ○次に塗香護身常の如し ○次に加持香水灑淨常の如し ○次

に草々法例の如し。但し大日印言の次に、藥師(定印大呪)孔雀、聖觀音、不動(劔印慈救)訶利帝等の印言を加へ結すべきなり。 ○次に加持眞言等師云く、吉哩の明を以て之を加持せよ。

(三)紳加持 持佛堂の禮盤若しは半疊の上にて此の作法あり。

(一)三禮 註には(二)金一打に作る(三)金一打に作る(四)の字か。

大日胎 藥師 孔雀 聖觀音 不動 訶利帝 已上各の百遍之を誦し、
獨古を以て之を加持せよ。 本傳了る。

或師説に云く、散杖を以て紳中に眞言を書す此の施羅尼より外題なし、先師の口傳と云云
唵沒素嚕、哩藥止、羯囉縛、多羅古、室車駄羅車沒車、穆吉他、薩縛鉢野、囊哩耶
莎訶、他彌多、阿吠莎訶、阿怛鉢怛吠莎訶。

○唵縛日羅耶莎賀。 此れ決定成就の眞言、唯し一心に念じ及び頂戴すれば、即ち
自ら生ずること易し云云。

○産兒浴湯加持東方に向ふなり、但し便宜に隨へ。

○先づ湯側に於て三部被甲護身等常の如し ○次に八葉の印を作り、觀想せよ、湯は是れ

八功德の池なり、其の中に八葉の蓮花あり、花上に産兒を坐し之に浴すと。 杵を以て
加持し眞言を誦す等。 大日胎 藥師大呪。是れ即ち七佛藥師經下卷に説く。 不動火界 聖觀音 孔

雀 訶利帝已上各の廿一反 沐浴の間、座を起たず、不動の呪をもて之を祈念せよ。

○註に云く、或は上の眞言に此の眞言を書き加ふ、但し是は普通にあらず、上の眞言許なりと。

○傍註に云く、已上沐浴の間は不動慈呪を誦して加持するなり。

○眞言 大眞言
○圖 次頁參照

讚岐院降誕の時御湯加持の事 成就院大僧正寛助に仰せて、即ち法服を着し五古を取り、孔雀の尾等を進め奉る。 後朱雀院の御時成興僧正、孔雀の尾を持して加持し、彼の佳例に叶ふ、人以て之を歎美す。

○用鉢作法 佛供・施食並に諸食を加持し、染愛王の○眞言又は十力の明を用ふ已上佛供・施食の外に別に小盤あり四天王供云云 以下先師之を○圖す

已上の圖右の如し、鉢飯は杓を以て次第に之を分け入れ、佛供三度菜を加ふ四天王四度、哥利帝二度、施餓鬼一度なり、分け了て次第の如く之を加持し、其の後に自器に入れ食せしむるなり。

先づ三口食始めの事 第一に一切の善を修せんがために 第二に一切の生を度せんがために 第三に無上道を證せんがために

眞言功能等。 施殘食眞言の事。 毎食の餘加持すること七反し、右を劔印に作る、食を施すに由るが故に、常に聖者隨逐して擁護を蒙り、影の如く形に隨ひ、非人等をして惱害せしめず、聖者の壽力知福を獲、速かに苦海を越えて疾く無上菩提を證

す。

施 餓 鬼

三古の印を以て施餓鬼の真言七反し之を加持す。施餓鬼三反。施餓鬼真言七反。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

佛 供

菜を加ふ

鉢印を以て加持し、施殘食真言七反す。佛供三反。佛供真言七反。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

(一) (二) (三) (四) (五) 原本梵字

先づ鉢を觀する事

即ち念へ此の食清淨無毒平等大般涅槃の食となすと。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

鉢

後夜に粥を入れ、朝に飯を盛るなり。

鉢に觀法あり

鉢印を以て染愛王の眞言七反す。又同印にして十力明七反す。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

哥利帝母供

三古の印を以て詞利帝眞言七反す。詞利帝眞言七反。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

四天王供

入加水

三古の印を以て四天王の眞言七反す。四天王眞言七反。次に同印、施甘露真言七反。施甘露三反。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。鉢に觀法あり。

四天王の明。 每食先づ少分を出し清水を和し、加持すること三反七反淨處或は地或は石上に瀉せ、即ち常に四天王衆天隨逐し擁護を得、冤敵・人・非人等の障礙する所とならず。

哥利帝眞言 每食少分を母子に施せば灾横を遠離す。

○手洗加持 右は劔印 八字文殊眞言七反を誦するなり。

○柴洗手法 右手を以て草木の葉を持ち、合掌の中に入れ押して曰く 唵尾昔帝ソハカ 又た草木を持ち口に含み之を旨 眞言を誦す。唵迦羅目ソハカ。已上大師御説云云

○廁作法 烏瑟漉摩三摩地 先づ彈指三度 次には誦して云く 次には呪に云く 唵縛日羅穆娑穆 次に去る時彈指三度す、呪に曰く 俱路駄南咩惹ソハカ 已上師説此の如し。

(一) 廁作法註に云く、此の作法は法衣を着せずと雖、更に苦しからず。三に青依鬼此は、廁に住す、彈指の間三度鬼名を唱ふ

凡そ不淨の時又は廁に趣く時の印言 右拳にして大指を立て、身の五處を印せよ。真言に曰く 俱路駄曇吽弱

〇〇隱形法 摩利支此に威光といふ此の天護身の要法なり。二の印言を以て結界をなす身印隱形
一、身印とは是れ大金剛輪の印なり五處を印せよ、心、額、左右の肩、頂なり。真言 唵阿彌底也二摩利支ツハカ

(二)小呪 摩利支莎訶

二、隱身印とは恒の如し師云く左手拳にし、中をウツツにし、身に住めし(二)小呪を用ひよ。

此の印言をもて、身の五處を加持する力に依るが故に、一切天魔等其の便りを得ず乃至是の故に七種所行の時ごとに、印言を以て加持すべし。

- 一、睡眠の時
- 二、覺寤の時
- 三、沐浴の時
- 四、遠行の時
- 五、客に逢ふ時
- 六、飲食の時
- 七、廁の如きの時。

陀羅尼集經第十に云く 日前に天あり、摩利支と名く、大神通自在の法あり、常に日前を行くに日彼を見ず、彼れ能く日を見る、人として能く見ることなく、人として能く捉ふることなく、人として能く害することなく、人として欺誑することなく

く、人として能く縛することなく、人として能く其の財物を責むるなく、人として能く對することなく、怨家のために能く其の便りを得ず。

故に不空三藏、白檀の像を造り並に大佛頂陀羅尼を書し、王子御護のために進らせらるゝこと表制集に見ゆ。
又た玄宗皇帝、灌頂壇に入る時、始めて此の法を受けたまふ云云。

〇〇寢時結界 五大尊の印真言之を用ふ云云。但し不動三三摩耶攝召印真言。已上遍照寺次第にありと云云。

師傳私記に曰く 先づ三部被甲護身了て、次に五古印慈救呪是を五大印言となす。次に三三摩耶印言常の如し、但し師説あり、大指外縛するなり。次に摩利支結界之を用ふべし。

〇〇降伏諸魔法 若し人ありて死亡せる家に入らんと欲はば、是の心呪二十一返を誦せよ、即ち安穩なることを得ん。

若し人ありて惡道を行かんと欲はば、是の真言廿一遍を誦せよ、即ち安穩なることを

二、小呪 唵阿密
囉觀納婆縛 吽發吒
是れなり

三、小桶二口、右供
師の左に水桶、右
に粥桶なり。五穀の
粥を置くは、只だ白
粥なり。打敷 暫く粥
桶の上に此を置く
打敷の香を以て水
桶に入れ、灑水とし
次に同香を以て手
に塗るなり。右
手三鉢の印に作り
軍茶利の小呪二十
一反を誦して之を
加持す。折敷の
花をさす。

得ん。已上は共に馬頭の二小呪を用ふるなり大御室の御説

- 神供 ○先づ幣八捧を立てよ四角に各の二 ○次に三小桶二口に各の杓を加へよ一口香水
- 次に盛米香花切紙一三折敷 ○先づ白塗香淨三業三部被甲東方に向て坐せよ、或は壇所の方なり。
- 次に香水を加持す印言は常杓を取りて覽鏡を誦し、三度地に寫せよ師云く、淨地の義と想へ。 ○次に定印を結んで觀想せよ、淨地變じて瑠璃の地となる、各の座上に覽字あり、字變じて天衆部類眷屬となると云云 ○次に大鈎召の印言を結ぶ常の如し ○次に加持飲食三古 唵三波羅三波羅吽 ○次に施甘露印右手五指を展べよ朱三反 唵蘇嚕蘇嚕鉢羅蘇嚕鉢羅蘇嚕莎奇 ○次に毗盧遮那一字心眞言同印 曩莫三滿多沒馱南觀七反
- 師曰く、右手の掌中に卍字あり、變じて功德海となる、一切の甘露醍醐を流出し、一切の鬼神みな飽滿することを得て乏少なることあることなし。
- 次に杓を取て粥を獻ぜよ七十二天の明各一度を誦し之に供せよ ○次に香花米切紙等を散せよ三度
- 次に普供養印明並に三力偈常の如し ○次に形の如く啓白せよ所求の事なり、合掌 ○次に心經

を誦せよ無限の大悲法施の心を發せよ ○次に廻向 ○次に發遣拳を仰け 唵縛日羅母乞叉穆

供師去り了て驅仕、壇地の上に於て幣並に供物等を焼くなり。
入壇の時 作法次第は上の如し、但し一夜の間、初後二箇度供するなり。(初夜は八
方天に供し後夜は廿天に供す、印言は大鈎召之を用ひよ) 召請發遣なり、但し正
しく供する時は、各別の明なるのみ。

二、召請云云 召
請には八方天をも
廿天をも大鈎召を
明にて誦するも各
別の印明なり、正
供の時(飲粥の時)
は、八方天をも廿
天をも各別の眞言
にて供す撥遣は八
方天も廿天も彈指
なし。
三、晨朝一切時
晨朝と通用の時ま
ことなり。
四、手 左手なり
に作る。一本に還
は善心擁護とす。

- 施餓鬼 東方に向て居せ經に云く晨朝一切時と文り、又説に、入定まるの時之を行すと。 ○三部被甲 ○淨地印言は常
- 淨土變如來拳 普集右手空火相捻して、風を招くこと三反せよ。 唵補保里迦里但里但佗識多耶。 ○開咽喉印は上の如し、但し中指を撥ふなり、彈指の聲あるべし。 唵補保帝里迦里但里但他藥多耶。
- 食器を三手に居る偈を誦せよ。 至心奉上 一器淨食 普施十方 盡虛空界
- 一切餓鬼 先亡久滅 山川地主 乃至曠野 諸鬼神等 皆來至此
- 受我此食 依我呪食 離苦得樂 往生淨土 發菩提心 行菩薩道 晝夜
- 恒常 擁護於我 一切善願 皆令滿足
- 五大願

(一) 南摩云云 原是今對譯文字
本施無畏印 此
法無畏印 食
器に覆ふ
前印 施無畏
七反を誦す
他字心或は
本に地に作
五佛次第の
陀生阿闍如
陀生阿闍如
發菩提心明
地質多母恒
三昧耶戒明
三摩耶薩祖
仰て二度彈
唵日羅母を
常日用ふ
其の片方に
の片方に土
丸泥云云

是は兩塔の形を
合する時なり
つある塔の形
合せて其の内
あるなり
云云 是は土を
しく塔形を以
土なへす時な
塔形を成する
紙を挿み之を
傘蓋とす

○當食器の眞言印は前 南摩薩婆但他揭多一婆盧吉帝二唵三婆羅三婆羅吽七反
蜜甘露明(二)施無畏印 唵蘇婆耶但他藥多耶唵蘇嚕嚕鉢羅蘇嚕鉢羅蘇嚕莎弟

五如來名號各の三反 南無(五)寶勝如來除慳貪業福德圓滿。 南無妙色身如來破醜陋形
圓滿相好。 南無甘露王如來灌法身心令受快樂。 南無廣博身如來咽喉廣大飲用受用
南無離怖畏如來恐怖悉除離餓鬼趣。

○發菩提心明 ○(七)三昧耶戒明或は三反 ○尊勝陀羅尼 ○光明眞言 ○心經所
廻向(八)發遣常の如く或は蜜止蜜止穆莎賀。

○造塔作法
○先づ阿字を以て地上に置き、土色白なり、珂雪の如しと。五字の眞言を以て其の土
を加持す、眞言に曰く(右手を以て五指の印を作すなり)阿鑊曩憾欠。

○次に(丸泥)丸泥の中に入る、眞言 唵達磨馱都、藥陸莎
弟、 ○次に(二)押し平らむる呪 唵囉日羅輸囉莎弟。 ○次に(三)傘蓋を覆ふ眞言

唵囉日羅輸囉莎弟。 已上造立作法。

- 先づ塔を一處に集め立てよ若し廣境を用ひば廣さは塔數に隨ふなり。 ○次に五供を調へよ例の如し ○次に供師着座 ○次に灑水 ○次に供物を加持せよ皆な例の如し ○次に神分を啓白す
- 次に供養法十八道、但し大日尊なり、但し佛所を證し唱ふべし、云く或は釋迦一に付て觀すべきなり。 南無舍利形像浮圖寶塔三度 ○次に散念誦 大日 延命 一字 ○次に後供養常の如し ○次に廻向常の如し

國譯澤抄第九 作法終

國譯澤抄第十

K110

- 御遺告口傳
- 十八日觀音供
- 受者加持
- 高座加持
- 小供養法
- 無言行道
- 灌頂支分
- 教授用意
- 護摩
- 瑜祇經印明

○○御遺告 避虵法とは何んいか調伏の法なりとは是れ常の事なり、答へて曰く、避虵とは避とは去なり虵とは不祥を避くる意なり。

攝真實經の中に見ゆるなり。御遺告の中、祕事の多分、文字を替へて此の如く書かしめ御まじなり。彼の經の下に云く、譬へば寶珠の、宅中に安ければ、災難を辟除し、七寶現前するが如し、此の妙經典も亦た復た是の如し云此の文を以て彼の事を得心すべき者なり。

問ふ、其の法は何時之を修するや寶珠の法の種子三形印言は皆な後七日の法の如し、更に相違するこ
となし、後七日の外、寶珠法とて別にはこれなし、所詮は不動に習
ひ入るなり。

答ふ、眞言院後七日の法並に晦御念誦、即ち此の法を修するなり、如意寶珠の徳は

諸の不祥を避くるが故に、年始の御願、専ら此の法を修せらるゝなり。

雲管を徹す事 徹雲とは是れ墓所の異名なり本文を見よ云云
更に之を問ふべし。

是れ則ち師資相承の最極の祕事なり。仍て奥院を指してと云ふなり、是れ尤も仰信すべし、神なり妙なり。

奥砂子法の事 降三世法なり、能く能く之を祕すべし。

南天凶婆とは阿久波羅門なり。

ウー山 土心水師 竹木目底何の表示、室の字の
なる乎、上みの作 一生の字、下も 土壘 心惠 水法 竹

木目箱の
なり。

已上口傳、此等に過ぎざるか。

○○十八日觀音供の事長者を參らしむる、毎月十八日にこれあり、
風情なく供養法一座なり、一人供養法なり。

二説あり。觀音を請すると 十一面となり。此の中、十一面を用ふべきか。

協士梵天
帝釋芳源阿闍梨の傳なり。本尊十一面協士梵天
帝釋此の如く習ふ許りなり。

入壇口傳等
○受者加持の事 先づ衆僧立ち列するの間、教授を留め置き、受者を阿闍梨の房に召し入れて之を加持せよ。

○淨三業 ○三部・被甲 ○虚空網 ○不動 ○降三世 ○阿闍梨位印言 虚合して二内に入れ、二空を以て二風の根を捻せよ。 ○念佛 五指を以て之 ○五佛真言 金剛界 ○阿闍梨位真言 火、二水を
○不動呪等 百返或は廿一反不動慈救呪許
卅七遍 りなり。降三世無し。

傍註に云く、大日印明等なしと。

○高座加持の事 大阿闍梨、左方より遶りて戌亥の角に至り、壁代内にして先づ高座を禮す 一度、一 次に右跪いて五指を以て高座を加持し、並に護身結界せよ。 或は説く
○淨三業 ○三部・被甲 ○地結 ○金剛墻 ○虚空網 ○大三昧耶 ○不動 加持を用
○降三世 大呪印明
慈救呪 常の如し
又た更に小しく禮して登て高座に着し了る。

○高座に於て護身加持する事 常の ○先づ塗香 常の 淨三業・三部・被甲 ○次に 常の 灑淨 常の如し、五古を以て香水を加持すること廿一返せよ。唯阿闍梨帝 ○次に三部・被甲・並に 唯阿闍梨帝

兩界印言 智學印言は常の如し、五古印、同じく五字眞言(一)阿味羅併欠 ○不動 慈救呪 ○佛眼等 なり大呪印明常の如し、五眼印

○無言行道の事 結印誦明は兩界同じからず 不動或は無能勝 兩界に 通ず。皆な是れ鎮場を結界する義なり。

無言行道に打任ては印を結ぶ事、常に人せぬげなり、最も用ふべきなり、初め行道せむとする時、こまぬきて 無言行道に打任ては印を結ぶ事、常に人せぬげなり、最も用ふべきなり、初め行道せむとする時、こまぬきて 加持すと見ゆる事もあるまじ云云

○承仕、支分を儲け置くべき事。 散杖八枝の内 五瓶並に三昧耶兩壇等の料なり、若し一壇 齒木二枝 十指の量なり、長さ七寸許りに當 闍伽桶二口、杓を加ふ 一口は初夜の料、承仕に賜 ぶて、前夜丑の時に水を汲ましひるなり、兩壇の外 闍伽等 一前半之を備ふ内 前一 所 初夜料、半 警水料乳坑一口 暫く右机の 小壇の机上に 闍伽等 一折敷 土器 散杖五枝、並に道具等 衣箱の蓋 壇上敷曼荼羅 兩界の初後相 替ふ各一鋪 中輪瓶四角羯磨四面闍伽器火舎鈴杵金剛 盤御佛供御明佛布施等 御影御供等 已上は承仕之を用意すべし。

冠頭に云く、此の流には字供養なし云云 (二)阿云云 原本梵字、對譯文字は大日經第三所載による

(一)承仕云云 灌頂支分なり。 (三)闍伽等 傍註に云く、皆な土器なり。 (四)闍伽云云 傍註にいふ、上に注する所の兩壇の外 の阿伽等は是れな

○(二)阿闍梨支分の内なり
灌頂支分の内なり
傍註に云く、燒香
之れあるべし

○(三)加持 傍註に
云く、加持は
囉囉呼吒の明
を以て廿一反之を
加持す、獨結を
加持す、獨結を
註に云く、兩説な
り、但し白絹をも
て常事となす。
各色に作る一本に
各色に作る一本に
の定めに結び、結を
も其の色にする説
あるなりと。

○(二)阿闍梨支分を調ふる事當日の朝なり 闍伽一口水あり、杓を加ふ、盤折敷、小刀、五色の糸、同じく
絹等の造華或は兩壇の五瓶合せて十口若しは五口、之を並べ置き、又た脇机上に瀝水、塗香、
散杖等之を置き但し是れは古物を用ふるなり。

先づ塗香、次に淨三業三部被甲、此の次に瀝水並に惣加持
之を用ひざるが故に宮之を用ひしむ云云覺成は用ひず云云

○先づ瓶を取り、綵帛二切をもて左右之を縛す、十口若しは五口、二切とは初をいふなり、次に瓶あるべきなり、推じて之を知るべき故に注せず

○次に闍伽水を(三)加持し、水を五瓶に入る盤上五の角に置く、或は又た五方に置く。

○次に白絹二寸許り切り兩壇の料十切若し兼用せば五切、五寶等各の一粒二十種一裹す、而も合して十裹な
り若し一壇ならば、五裹を以て白絹を以て細く攪りて之を結び、而して五寶を賢瓶の中に
入れよ、或は(各)各の絹を以て之を結ぶ其の端を引き出すなり。

○次に五佛の眞言を以て各、百遍之を加持せよ。金剛界五佛の眞言なり。 ○次に辨事明を以て惣
じて加持すること百遍し了れ。 ○次に造華或は各瓶に差して壇上に立てよ方角は教授用意すべし。

○次に五色の糸凡そ糸の長さ六尺許りなり、線し了て煮香し、加持すること當の如し、紙に裹んで期に臨み、三昧耶戒の脇机上に置くなり、此の線の事、或は最前に沙汰あるか。

○次に齒木横楯白色の糸二尺餘を以て五葉花を取て之を結び付く兩説あり、二枝の内、

一枝は結び付けざるなり、件の加持、具さには戒體の文の如し。

已上、内陣に於て教授等調べ了て退出するなり。

相ひ向ひ 花は莖の方を上にして房を下に向ふるなり



ニカラマキなり。

受者は此の細き方をかむなり。

○教授用意の事 兼日、敷曼茶羅尊位等を覺悟すべし。

○先づ顯文を切紙に書寫して胸に納め、兼わて合香料の丁子少々帖紙の中に入れて持つべし合香料の丁字を持つ事、三摩耶戒にこれなし、初後に之れあるなり。

○次に阿闍梨、高座に着せしめて後、教授座を立ちて壁代内に入り誓水料(ニ)乳垵ニカラマキを取
りて机上に置き、阿闍梨の氣色を伺ひて歸出し、受者を幕内に引入せよ三衣並に香爐を持すべし。此

の時の作法別の事なきか。或は説く、音を出して之を呼ぶと。但し必ずしも爾らず、只だ形勢を以て勸進すべきか、等輩の者には聊か腰を曲ぐべし、尊重の者には蹲踞すべきなり。

○次に受者内に入て遶りて正面に立つの時或は順、或は逆、教授は必ずしも相ひ順はず、早速本座に歸出して、惣禮之を勸めよ或は行事僧之を勸む。

○次に廻向了て受者磬を打つの時、教授座を立ちて幕内に入り、關伽を受者に取り傳へ、金剛線を左の臂に懸けしめよ、乃至供養の具等一一之を與へよ其の次第は覺悟すべし、戒律の文の如し。

○次に誓水香水を用ひ、之を顯露する勿れ、誓金龍鬚白檀等を入るゝなり。香水に先づ誓金龍鬚白檀等開梨の手より取て教授飲ましむ、少し許りなり、件の土器を前の机下に置き了れの誓水器は大阿闍梨教授に授く、教授受者に授け、受者之を取て飲ましむ。

○次に齒木の時、受者を下座せしめ、十弟子の一人を選んで薦・手洗水瓶等を取り入れ薦は三重に之を折りて禮盤上に敷き北に向へよ或は東に向へよ。

之を投じ其の間の作法は本文の如し悉地の成否を見了りて之を取り、納受の者之を胸にせる後、先づ教授退出して本座に着くなり。

○次に初夜の時指貫を磨ると否とは所に隨ふ、用意あるべきか。振鈴以後、座を立ちて後戸より入り、阿闍梨禮盤を下るの時、入て承仕、禮盤・脇机・磬臺等乃至五瓶花を取て大壇の机に移し置くなり。但し胎藏界中の四角白赤青黒、是れは則ち教授の沙汰にして、子又た金剛界中四角白赤青黒

細は承仕に之を知らしむる勿れ。

○次に阿闍梨の命に隨て屏風を立て、正面の戸を開き(一)香象を立て東に向ひて(二)覆面赤色を屏風に懸け了りて角より進出せよ初夜は西より出で、後夜は東より出でよ。右は跪いて袖中に於て大鈎召の印を結び、言て受者を招き入れたて、屏風の内に於て先づ含香し、次に塗香す。或は用ひざる事あるか、故に宮の時予が灌頂には塗香なきなり。

○次に(三)覆面赤色前方に垂れて長きなり。

○次に普賢三摩耶(四)印言を授け、次に教授左手に受者の印を握り、徐かに香象の上より過ぎ入らしめて、壇前に向つて起立し、阿闍梨の命に隨ひて挿華之を投せしめ、彼の尊位を明示し、花を取て納受者をして胸にせしめ畢れ、次に小壇の間の作法は、阿闍梨の命に任せて之を行せよ但し内心には存すべきなり。印可の時、暫し教授立ち去るべきか。

○次に受者の事了て、暫く堂内に坐し、阿闍梨後供養以後退出す、或は後供養以前に元の如く退出するか古説に、今夜堂内に通夜するを吉とす云云。

○次に後夜作法の事 大旨初夜の如し、受者金剛線前の如く隨身せしむべきなり、相ひ替ること香象を西に向へ、屏風は出入の所許りか。

(一)香象云云 註に云く、香象は承仕香を盛り火を置くなり。
(二)覆面云云 註に云く、覆面は以前承仕懸け儲くるなりと。
(三)覆面赤色 註に云く、覆面加冠なし。
(四)印言 註に云く、印は外縛二中立て合す、眞言及又其有、教授眞言を誦すべきの由、受者に示すべし。

○護摩の事一人の護摩師、初夜、後夜共に各の一時に之を息災なり。但し東に向ひて之を修す、是れ増益を兼ねるの意なり。大壇振鈴の時、座を立ちて護摩の所に向ふなり、兩界に付て之を行す、但し供養法なし。

○初夜胎藏 初火天段常の如し 本尊段 種子、囑 三形、塔 印、五古 眞言、阿毗羅吽欠 召請・撥遣、之を用ふ。芥子・供物同じきなり。諸尊段 種子 三形・印・言、前の如し。

胎藏の大日を以て中臺となし、十三大會の五百の餘尊併て之を請し供せよ。
中臺の大日に引かれて十三大會等來ると觀すべきなり、召請撥遣にも各別に印明は之を用ひず、只だ外五古印五字印明許りなり、供物も五字印明なり、同時に供を受くと想ふべし。

○後火天段註に云く小野の説は後火天段の處に不動を供す云云

○後火天段 八方天を供するなり。種子等は常の如し、大鈎召印言之を用ふ。
八方天供の事、蘇油散供香は普供養眞言を用ひ大小約各の三度常の如し、乳木同じく普供養眞言等なり。混屯の供許りは各別の眞言を以て之を供せよ、其の眞言等は常の如く、世天段の如し、但し混屯の供も大約は普供養眞言なり、小約にて各の一度、各別の眞言を以て之を供するなり。
世天段例の如し

○後夜金剛 初火天段常の如し 本尊段 種子是れ即ち三昧耶會中臺眞言の末字なる 三形・塔

○後火天段註に云く小野の説は後火天段の處に不動を供す云云

印・智拳・眞言 唵縛曰羅駄觀鏡。 召請・撥遣・芥子・供物同じく之を用ふ。○諸尊段三十七尊 後火天段 十六尊二十天を供するなり。長短の吽字を以て種子とす、大鈎召印言之を用ふ。 供物には種子に唵莎賀を加ふ。十六尊 唵吽莎賀。 廿天 唵吽莎賀

問ふ、召請に大鈎召を用ふるは其の謂れあり、撥遣に此の眞言を用ふるはいかん。答ふ、此の眞言搖動し來去する心なれば、來も去も同じ心なり、仍て撥遣にも失なし。

世天段例の如し

○瑜祇經印明抄

○峯觀波印 外五古印なり、此の印を率都波の印と知るを秘密とするなり。 ○普賢三昧耶 進・力を屈すること鈎の如くし檀・惠・禪・智を合せよ、是れを彼の大印と名く。

師云く、是れを秘密の契となす、所謂る外五帖なり。
○密言 鏡(ま) 峯觀波法界普賢 一字心と名く。已上は金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經序品に出でたり。

○染愛王印 常には染愛王といふ、暫く經説に付くなり。私に云く、常には染愛王とは二手金剛拳にして云はず、此の眞言を染愛王といふなり、今本説に付て染愛王といふなり。

(二) 庵云云 原本に梵字あれども今は略す。

(三) 庵云云 原本に梵字あれども今は略す。

(三) 庵云云 原本に梵字あれども今は略す。

内に相ひ及へて縛となし 忍・願を直く豎て針にし 相ひ交へよ即ち染を成ず
是れを根本の印と名く。師云く、金剛縛して二中指を立て微し屈して第三節許り相ひ
及へ四處を加持せよ。真言師云く根本明と名く。 唵引摩賀囉引誑囉曰路瑟泥灑縛曰羅薩埵弱
吽鍍殺。已上は一切如來最勝王義利堅固染愛王心品に出でたり。

○大阿闍梨行位印内縛して二小・二頭を立て合せ、二大を開いて二頭の間に附けよ。 定・惠の手を以て、肘を屈して上に向へ合
掌して肩と齊ふし、各の戒・忍・方・願を屈して掌に入れよ、或は坐し或は立つ皆な成就
なり、是れ所謂る祕契なるのみ。○真言 唵囉曰囉素乞史麼麼賀引娑引但囉合吽吽
已上は攝一切如來大阿闍梨位品に出づ。

○金剛薩埵印只だ内縛なり。 二手内に相ひ及へ、各の禪智を以て進力を捻せよ。師云く
印相は文の如しと。真言具さには金剛薩埵菩提心明といふ。 唵囉曰囉句捨冒地止多吽引 已上は
金剛薩埵冒地心品に出でたり。

○愛染王印 二手金剛縛にして 忍・願・を豎て相ひ合せ二風を鉤形の如くせよ
檀・惠と、禪・智と 豎て合せて五峰の如くせよ 是れを羯磨の印と名く

(二) 呼云云 原本に梵字あり、今は之を略す。
(三) 須一本に復の字に作る。

亦た三昧耶と名く。師云く、外五指印常の如し或は大指外縛す、大指外縛するは常に之を用ひず、或る説なり。 真言師云く一字心と 唽唽積唽弱。 須らく扇底迦 五種相應印を説くべし 戒・方
掌に入れて交へ 禪・智相ひ鉤結し

檀・惠合して針の如くし 忍・願を豎て、相ひ捻し 進・力各、偃め豎てよ 是れ
を瘁災の印と名く

進・力・忍・願を捻し 四指の頭並べ齊ふせよ 是れ布瑟置迦 母捺羅太印なり
進・力を蓮葉の如くする 印を伽跢耶と名く 進・力・忍・願を捻し 上節を
三角に成めよ

阿毗左嚕迦 當さに此の密契を用ふべし 進・力屈して鉤の如くし 誦するに
隨ひて

金剛央俱施を招召せよ 一切の時作業 大染金剛頂 五密印を説き畢る。
師云く、此の五種の印は、愛染王の別印に用ふべし眞言は口決 已上は金剛峰樓閣一
切瑜伽瑜祇經愛染王品に出でたり。

○大勝金剛印 我れ今更に印を説かん 金剛最勝の心 内に豎て十度縛し 忍

(一) 庵云云、原本に梵字あり、今は省略す。

(二) 庵云云、原本に梵字あり、今は省略す。

(三) 義謨云云、原本に梵字あり、今は省略す。

(四) 阿尾云云、原本に梵字あり、今は省略す。

(五) 心中 傍註に云く、心中に取て上みなり、心上なり。

願屈して頂の如くせよ、是れを根本心 最勝轉輪の印と名く。師云く、頂の如くすとは即ち釵形はれなり。真言 (一) 庵慶賀囉瑟捉灑咩怛路嚩唎惡呼。

○金剛輪印 二手金剛拳にして 檀・恵と進・力と 四度互に鉤結せよ 是れを彼の密印と名く。師云く、印相は文の如し小金剛輪印なり。真言 (二) 庵囉日囉祈羯囉咩弱咩解呼。已上は一切如來大勝金剛頂最勝眞實大三昧耶品に出でたり。

○佛眼印 二手虚心合掌して、二頭指屈して二中指の上節に附け、眼笑形の如くし、二空各の恣・願の中節の文を捻し、亦た眼笑形の如くし、二小指復た微しき開いて亦た眼笑形の如くせよ、是れを根本印と名く。師云く、印相は文の如し。真言 (三)

囊謨引婆譏嚩觀烏瑟捉灑囉囉嚩塞怖囉入縛攢底瑟吒悉駵路者寧囉囉他薩駵爾曳娑囉賀

○胎藏八字眞言王印 釋迦牟尼鉢印の如し、印を以て定より起し旋轉す、便ち本三

昧耶の印を結べ。師云く、先づ鉢印に住するは是れ定印なり。真言 (四) 阿尾囉咩欠

咩囉唎惡。師云く、件の八字を以て先づ腰の下もに布し、次に腹の中、次に心の中、次に額の中、次に頂の中心以上遍身の中心なりなり。次に額の小金剛部上蓮花部に當る次に心中佛部に當るに當る。

已上是の如く次第に布字し畢る。

(一) 名 或は各に作るは誤りか。

(二) 鏡云云、原本に梵字あり、今は省略す。

(三) 庵云云、已下眞言皆な梵字を添へたれども、今は之を省略せり、之を諒せよ。

次に二手を以て虚心合掌して契を結び、心に當て上みの明を誦して之を加持せよ。

○五大虛空藏印 毗首羯磨三昧耶 忍・願相ひ合せて峰鉢の如くせよ 是を法界虛

空藏 三昧密印と名く應當(一)に知るべし 次に進力を改めて三結の如くせよ

是を金剛虛空藏と名く 復た進・力を改めて寶形の如くせよ 是を寶光虛空藏と名

く 又た進力を屈して蓮葉の如くせよ 是れを蓮花虛空藏と名く 戒・方・進・

力互に相ひ及へよ 是れを業用虛空藏と名く。師口に云く、第五印は不空成就佛

印に准す。真言 (二) 鏡咩怛洛囉唎惡。師云く、此の五字の明、各の一字の上に歸

命の句を加へて、五大虛空藏の契に用ふるなり。

○金剛吉祥印 二羽金剛掌にして、檀・恵を以て内に相ひ鈎し、戒・方雙べ屈して掌に

入れ、恣・願相ひ合せて峰の如くし、進・力を屈して各の恣・願の上節を捻し、禪・智を

以て各の忍・願の初文を捻せよ、是れを金剛吉祥印と名く。師云く印相文の如し。真言

(三) 庵囉日囉室哩引摩訶室哩阿彌底也室哩引素摩室哩阿舍譏引囉迦室哩母陀室哩沒囉

賀娑跋底室哩成羯囉室哩舍備始者囉始制帝室哩摩賀三摩曳室哩引娑囉賀。

○破宿曜障印 内縛して指節を痛め並べ逼して二空を豎てよ、是れを破七曜一切不祥

印と名く。師云く印相は文の如し。真言 唵引薩囉怛囉三摩曳室哩曳娑囉賀。

○成就一切明印 定・惠の手を以て不動尊刀印を作り、刀を以て及へ互に掌中に挿め、即ち成す。師云く印相は文の如し。真言 唵吒吒吒烏合_ニ吒烏合_ニ置智置智、吒烏吒烏、吒烏吒烏、囉囉娑怛囉囉呼_ハ囉囉呼_ハ。已上は金剛吉祥成就品に出でたり。

○金剛藥及印 我れ今更に印を説かん 戒・方・忍・願の指 内に相ひ及へて齒となし 檀・惠曲げて鈎の如くし 進・力及び禪・智 由はし笑眼形の如くせよ 是れを根本印と名く 亦た根本心と名く。師口に云く、大旨は文の如し、進・力、禪・智と各の端相ひ捻せよ、但し進・力の端相ひ柱へて禪・智に着くる勿れ等云云。真言 唵麼賀藥乞及囉囉娑怛囉囉呼_ハ囉囉呼_ハ。已上は大金剛焰口降伏一切魔怨品に出でたり。

御本記に云く、全部十箇の卷、皆な長者僧正覺成の抄と爲す度度自筆を以て歎ずと此いふ予之を部類す。此の内、尊法作法併せて彼の僧正より傳受し了る。師匠永嚴法印、成就院僧正に隨ふ、

門弟の子、稟承する所、多く相違あり、仍て更に尋問する所なり。

抄の傍に注を付する所並に裏書等、狼籍殊に甚だし、敢て外見に及ぶべからず、我が命に背くの輩、三寶罰せんことを證す、若し自ら他人に授けん時は、私注裏書等を除き、之を略抄すべし。

沙門 北院御室御名

寛文十二年二月廿三日書寫し了り、同じく一校し了る。

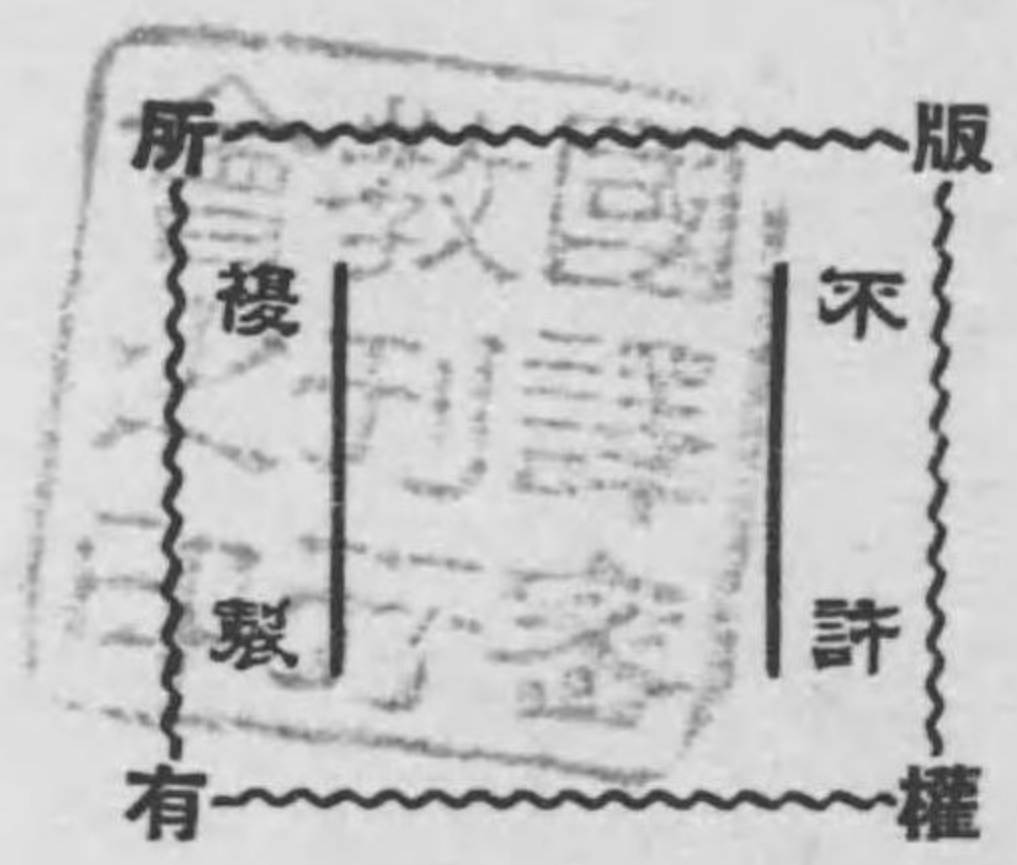
(朱)文政七甲申年初秋、類本を以て校し畢る。 祐 淳
右澤抄は大和初瀬 能滿律院全教和尚の珍什の一書を借覽し國譯し了る。(編者)

國譯澤抄第十終

大正十二年七月二十日印刷
大正十二年七月二十五日發行

國譯密教事相第五奧付

【非賣品】



禁轉載

編纂者 塚本賢曉
東京市小石川區關口駒井町四番地

發行者 伊豆宥法
東京市牛込區若宮町三十五番地

印刷者 渡邊常三郎
東京市芝區愛宕下町三丁目一番地

印刷所 國譯密教刊行會印刷部
東京市芝區愛宕下町三丁目一番地
電話芝四九一五番

發行所

東京市牛込區若宮町三五
振替東京五〇一八七番
電話牛込二五二三番

國譯密教刊行會

353
28th

終